

日本遺産「坂越浦」をめぐる



坂越とはどんなところ？

坂越という地名は、延暦12年(793)の奈良東大寺の古文書に記載されており、古くからその存在は知られていた。全長約2kmの円弧を描く特徴的な地形の坂越湾と、その湾に浮かぶ生島(いきしま)が坂越を風や波から守り、この地を天然の良港にした。古来より瀬戸内の代表的な港として栄えた。

江戸時代に「西廻り航路」が開設されると、その北前船(※)の寄港地として発展した。元文から文化の時期(1736~1818)には坂越に廻船問屋が4軒あり、船宿も30軒存在していた。安永5年(1776)4月12日には1日だけで千石船から30石船まで合わせて24艘、水夫乗客合わせて166人もやってきたという。

その一方で坂越は瀬戸内海流通と千種川の高瀬舟舟運とをつなぐ拠点でもあった。千種川を利用する運路は17世紀には成立していたといわれる。内陸部からは年貢米の他に製塩に必要な薪・麦・こんにゃく玉・和紙などが、下流からは塩や海産物が運ばれた。年貢米をはじめとした貨物は大八車に積み替えられて「大道」を通過して坂越湾へ、そこで廻船に積み上げられはじめ全国各地に運ばれた。

その後北陸の北前船の台頭により瀬戸内の廻船は衰退していく。その中で坂越の廻船業者は方向を転換し、赤穂の塩を江戸や上方に運ぶ塩廻船として明治まで生き残った。だが明治38年(1905)塩専売制実施により坂越の廻船は幕を閉じた。

平成30年(2018)に「北前船寄港地・船主集落」として坂越は**日本遺産**に追加登録された。

(※) 北前船とは？

江戸時代後半から明治時代にかけて繁栄した商売の形態のことで、上方と北海道をつなぐ西廻り航路を往復し、莫大な富を得た。北前船は、他人の荷物を運んで運賃を稼ぐのではなく、船主が荷主として各港で物を売り買いしながら航海する「買積み」が特徴である。

北海道へは米・木綿製品・日用品の他に、塩や砂糖などが運ばれ、反対に北海道から上方へは昆布やニシンなどの海産物が運ばれた。

これらの物流は同時に様々な文化の交流をも生んだ。

(1) 高瀬舟船着場跡

内陸部と舟運をつなぐ高瀬舟の発着場跡である。千種川を利用する高瀬舟舟運は17世紀には成立していたといわれる。内陸部（上流）からは年貢米の他に製塩に必要な薪や麦、紙などを、臨海部（下流）からは塩や海産物が運搬された。

年貢米をはじめ貨物はここで荷揚げされ、坂越の主要道「大道」を通過して坂越湾で廻船に積まれ、上方をはじめ全国各地へ運ばれた。

平成30年（2018）に設置されたモニュメントは船着場をイメージしたもので、コンクリートと石材で船形を表現しており、中央の石材はかつての船着場の石橋に使用されていたものを使っているとか。



(2) 木戸門跡

江戸時代には坂越浦の治安維持のため木戸門を設置し、番人を置いて夜間は門を閉じて通行を遮断した。また、罪人がでた時は門を閉じて検問を強化した。

平成7年（1995）にモニュメント整備され、「木戸門跡広場」として休憩所の役割を果たしている。

ここから石畳の道が続き、手入れの行き届いた家々が立ち並び、その景観の美しさは思わず足を止めて見入ってしまうほど。これだけの町並みはよほどの郷土愛がなくては維持できないだろう。



(3) 坂越まち並み館



大正末期に奥藤（おくとう）銀行坂越支店として開設され、その後もいろいろな銀行として使用された。館内には当時の風情を残すアメリカ製の大金庫が残っている。

坂越の町並み景観創造の活動拠点として、また観光客が気軽に利用できる施設とするため補修整備を行い、平成6年（1994）にオープンした。坂越の歴史や文化が展示されている。メインストリートである「大道」のほぼ中央に位置している。

(4) 奥藤酒造 (おくとうしゅぞう)

奥藤家は廻船業で財を築いた地元の大庄屋で、廻船の他に酒造・金融・製塩・電燈等幅広い事業を行った。300年前に築かれたと言われる母屋は、複雑な平面系を持つ大規模な入母屋造りの建物で、格式が高く、西国大名の本陣にもあてられた。

酒造りを始めたのは慶長6年(1601)であり、赤穂藩主浅野家の御用酒屋であった。酒蔵は寛文年間(1661~1673)の建物で、高さ2m余りの石垣による半地下式の構造が今も保存されている。

酒造りについては面白い言い伝えが残っている。「ある日、どこからともなくやって来た白髪の老人に、主人がお茶をだすと、その老人は何も言わずに、米俵と元柄杓(ひしゃく)をおいて出て行った。それを見た主人が、『これは酒造りをしろということに違いない』と思い、始めた」とか。この柄杓と米俵は酒造郷土館に展示されている。



奥藤酒造郷土館

昭和61年(1986)に開館され、酒造道具や廻船業関係の資料、民具などレアなものがいっぱい展示されている。また廻船の復元模型もある。

(5) 旧坂越浦会所



坂越の町並みを貫通する「大道」と坂越湾がぶつかった所にあり、坂越の顔ともいえる建物である。

この建物は行政や商業などの事務をとるための浦会所として使用されたが、同時に赤穂藩の茶屋としての役割ももっていた。二階には藩主専用の部屋「観海楼」が設けられており、眼下まで迫った坂越湾に浮ぶ生島が一望できる。

現在は博物館となっている。

(6) 生島 (いきしま)

坂越湾内に浮ぶ周囲わずか1.6km余りの小島であるが、秦河勝の墓があり、古来大避神社の神域として立ち入ることを禁じられてきたために、原始の状態を保っている。樹種は大部分が常緑樹で、特に蔓性植物が繁茂しているのが特徴である。我が国の植物分布の温帯林の限界をみるうえ



からも貴重であり、平成13年（2001）に国の天然記念物に指定されている。

生島には大避神社のお旅所があり、1年に1度だけ大避神社から神様を乗せて往復するために立ち入りが許されている。

（7）とうろん台

かつて坂越沖を航行する船舶に海洋気象知らせた。もともと灯籠台だったことから「とうろん台」と呼ばれるようになったとか。

神戸海洋気象台から坂越郵便局に入電する気象情報を、役場の人々が日中は「玉」と呼ばれる布製蛇腹の吹き抜けを柱の上にかかげ、夜はランプを吊るして船舶に知らせた。

当時のものを縮小して再現している。



（8）大避神社（おおさけじんじゃ）

大避神社は坂越の港と町を見守るかのように宝珠山の山麓に鎮座しており、秦河勝（※）・天照皇大神・春日大神を祀っている神社である。創立時期は明らかではないが、秦河勝が没した大化3年（647）に地元の民が彼の霊を祀ったことが始まりとされている。



（※）秦河勝とは一体何者か？

日本列島には古来から多くの人々が朝鮮半島からやって来た。一般に「渡来人」と呼んでいる。彼らにより漢字・仏教・製鉄・機織・養蚕など当時の生活に大きな影響を与えるさまざまな文化や技術が伝えられた。秦氏はこのような渡来人集団の中でも大きな勢力をもっていた。秦河勝は6世紀後半から7世紀前半の飛鳥時代に秦氏の族長的な存在であり、聖徳太子に仕えた実力者であった。しかし皇極3年（644）太子亡き後、蘇我入鹿の迫害を受けた。彼は難を避け、秦氏が渡来した時に上陸したとされる坂越に海路やってきた。その後千種川流域の開拓を進め、大化3年（647）に80余才で亡くなった。その霊を祀ったのが、高台に創建された大避神社である。

聖徳太子の御世、秦河勝が拠点にしていたのは京都の太秦。太子より賜った仏像を本尊として広隆寺を建立したことは有名である。

また秦河勝は芸能にも造詣が深く、神楽を創作制定し、後世の能となる猿楽、雅楽にも影響を与え、今日では雅楽の祖あるいは能楽の祖といわれている。

☆12の数のミステリー・・・坂越のパワースポット

- ① 拝殿へ向かう階段は12段
- ② 境内の井戸は12本の石柱で作られている
- ③ 初穂料はその昔12銅で、今も12の倍数で収められる
- ④ 神社を守る社家は12家
- ⑤ 祭の日程は旧暦の9月12日
- ⑥ 祭礼船は12隻
- ⑦ 拝殿の天井絵は12×8枚

これは秦河勝が海路坂越にやって来た時、12人の伴人を伴っていたからと言われるが真相は不明である。

☆随神門

出迎えてくれるのは、おなじみの右大臣・左大臣の随神たちであるが、門をくぐって振り向くと、なんと仁王像が・・・。
珍しい門である。これは神仏習合の名残と思われる。

明治の廃仏毀釈までは、その位置関係は逆であったという。



☆絵馬

拝殿両脇の絵馬堂には40枚以上の絵馬がある。昔坂越が廻船業で繁栄していたことを示す十数枚の船絵馬があり、なかには享保7年（1722）の日本では一番古いと言われる貴重な船絵馬がある。

また舞楽や能楽の絵馬もある。



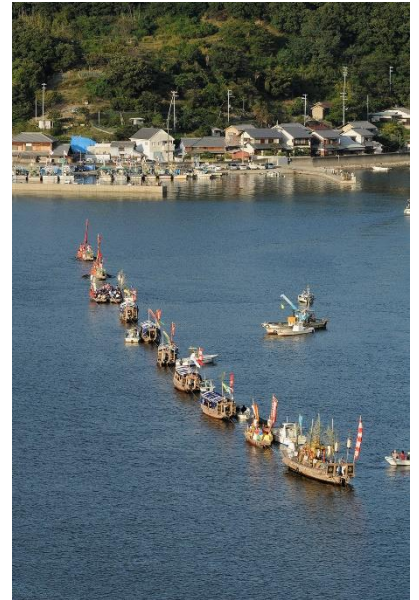
☆梅原猛句碑

「ひよんの実に似たるうつぼで流れ着き」

坂越を愛する哲学者梅原猛が能楽研究に大避神社を訪れた時に詠んだ句である。祭神の秦河勝が迫害を避けて坂越浦に流れ着いた時に乗っていたと伝えられる「うつぼ舟」とイスノキの葉にアブラムシが寄生してできた虫こぶが落ちた「ひよんの実」を重ね合わせたもの。

☆坂越の船祭

瀬戸内海三大船祭の一つで、国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年10月第二日曜日（旧は12日）に行われ、三百余年も続く伝統行事で、十二隻の和船を用いて、古来から定められた船順で海上を渡御し、「山のみか、海も紅葉の、秋まつり」と詠まれているごとく荘厳華麗かつ勇壮な神事でほかに類をみない船の祭礼として有名である。



(9) 妙見寺観音堂

明治維新まで大避神社と一体であったが、神仏分離により分かれた。

お堂の屋根は4枚の三角形が組み合わさっていて、ピラミッドと同方向を向いているとか、原始基督教の造りだとか諸説が飛び交うパワースポット。また全国的にも例が少ない「懸造」（かけづくり）の建物で、ここから見える坂越湾と生島の風景は素晴らしい眺めである。



(次回予告)

バスハイク

2023.10.15

兵庫史を歩くNo.40 国生み神話の「おのころ島」はどこだ？

淡路：沼 島(ぬしま)

神話の世界へお連れします！！